

愛着理論から見た老年期

日本学術振興会特別研究員（教育心理学コース）菅 沼 真 樹

Overview of Researches on Attachment in Elderly

Maki SUGANUMA

Bowlby(1969,1973,1980) proposed Attachment theory as a life-span developmental theory. But the researches on elderly attachment are not enough in comparison with other developmental stages. This paper provided an overview of researches on attachment in elderly, and suggested the relationships between the knowledge of elderly attachment researches and the existent subjects in elderly studies ; caregiver-elder relationships had to be considered based on their attachment history, and the clinical effect on life review could be considered from the viewpoint of the changing in representation. In addition, it was pointed the importance of perspectives of stability and discontinuity of attachment security.

目 次

- I. はじめに
 - II. 初期の記述的研究
 - A. 社会的ネットワーク研究
 - B. タイプ分類とそれぞれの特徴の記述
 - III. 老親と成人子—介護をめぐって—
 - A. 成人子(介護者)の個人差
 - B. 老親の個人差
 - C. 現実の介護場面との接点を求めて
 - IV. 過去の表象化—成人愛着面接と過去回想—
 - V. 今後の課題
- I. はじめに

Bowlby(1969,1973,1980)の愛着理論は、人の生涯にわたる愛着を扱い得るパーソナリティ理論として提唱されたものである。「振りかごから墓場まで」の生涯発達理論であるが、当初から実証研究レベルで生涯発達が扱われていたわけではない。殊に生涯発達の最終ステージである老年期に関しては、今日でも実証研究はまだ始められたばかりであると言える。

Bowlbyによる理論の提唱後、Ainsworthら(1978)によるストレンジ・シチュエーション法(Strange Situation Procedure; SSP)の案出により、乳幼児期の愛着の個人

差についてのタイプ分類やそれぞれの特徴の記述、その個人差と親子の相互作用との関連などに関して、非常に多くの知見が蓄積されてきた。更に、Mainら(1984)による成人愛着面接(Adult Attachment Interview; AAI)をはじめとする新たな愛着の測定法が開発されることにより、愛着研究全体としての関心が個人差の形成プロセスやメカニズムの解明へと移っていくこととなると同時に、実証レベルでの生涯発達研究が本格的に着手されることとなった。

しかし実証レベルでの生涯発達研究が開始されたといっても、当初は世代間伝達に関する実証研究をはじめとして、乳幼児をもつ親世代である成人期までを対象にしたものが殆どであった。老年期をも含めた言及がなされ始めたこと自体が1980年代の終わり頃のことであり、1990年代後半になって漸く老年期の愛着の個人差を扱う実証研究、すなわち所謂各タイプ間の比較を行う研究が行われるようになっていった。

本稿では、老年期の愛着をめぐる実証研究のこれまでの歩みと現在を整理し、老年期という発達段階の特徴を意識した場合に今後取り上げられていくべき課題を、愛着研究以外の老年期研究との接点から探っていくことにする。そのとき、愛着という術語は必ずしも用いてはいなくとも、実質的には非常に近接した事柄を扱っていると思われる研究も引き付けて概観することにしたい。

II. 初期の記述的研究

老年期をも含めた生涯にわたって愛着を捉えていくとする動きが現れた当初、基礎的研究として行われていたのは主に社会学的な流れを汲む社会的ネットワーク研究であった。それをもとに、各タイプの老人が持つ基本的な特徴の記述が開始された。

A. 社会的ネットワーク研究

Antonucciらは、コンボイ・モデルという概念に基づき、個人が持つ社会的な関係の数や性質、重要さなどの変化を記述し、老人の持つ社会的ネットワークの特徴を明らかにした(Kahn & Antonucci, 1980; Antonucci, 1994)。コンボイ・モデルとは、個人を取り囲む人々をコンボイ(護衛隊)にたとえ、個人が有する社会的ネットワークを捉えようとするものである。具体的には、個人を中心とする三重の同心円に内側の円ほど親密な人が入るように記入を求めるものだが、老人たちは内側の円に入った人々との関係が平均30年以上持続しており、そこでは家族関係が優勢であった。一方、外側の円に入った人々との関係では、成員数の減少が見られたという。また、コンボイ内の人々との関係が役割と結びついたままいる人は加齢に伴う危険が極めて増大することが示唆されているが、在職中の社会的ネットワークが仕事関係者からのみ構成されていた者が退職後に社会的ネットワークの成員の極端な減少を経験する場合などが、その典型例であるといわれている。Carstensenらは、人生後期に社会的ネットワークが狭まるに連れ、愛着関係は徐々に重要になってくることを強調している(Carstensen, 1993; Lang & Carstensen, 1994)。

B. タイプ分類とそれぞれの特徴の記述

Grossmann(1996)は、平均年齢69才の49名を対象としてAAIを実施し、安定・自律型が20名、不安定型が28名という分類結果を得ている。安定・自律型の老人は、不安定型の老人よりも人生満足度が明らかに高く、身体面でも主観的に健康だと報告した。また安定・自律型の老人は、社会的ネットワーク資源を使用する能力が高かった。このサンプルにおいては、社会的ネットワークの成員の殆どは親戚で、情緒的な満足感は親しい家族の中で最も満たされていた。家族成員については個人個人生き生きと語られ、その他の友人などについてはより一般的な言及に留まり言及量自体も少なかった。一方、社会的ネットワークの規模自体

は、愛着のタイプとは直接的な関連はなかった。しかし安定・自律型の老人は、不安定型に比してサポートの授受についてより多く語っており、危機的な状況に際しては他者からの援助を受けることも他者を援助することも容易であることが示された。

Webster(1997)は、社会心理学の分野で注目されているBartholomew & Horowitz(1991)の2次元尺度を用いて、老年期の愛着の個人差を捉えることを試みている。平均年齢67.9才の76名を対象とした調査では、健康状態と愛着スタイルは主観的幸福感に有意な主効果を持っており、健康な者はそうでない者よりも主観的幸福感が高く、安定型と回避型に分類された者は恐れ型に分類された者よりも主観的幸福感が高いことが示された。因みに、配偶者が現在いるかいないかは、主観的幸福感とは関連を持っていなかった。

またColin(1996)は、各タイプについて未実証ながらも以下のように論考を行っている。安定・自律型の老人は、不安(anxious)型の老人よりも、平均的により長く健康と幸福を維持する可能性があるだろう。なぜなら、安定・自律型の老人は安定型の子どものように、自我弾力性(ego-resilience)があり社会的コンピテンスがあるだろうから、不必要的ケアは求めずに、逆に必要な場合には容易にケアを引き出し得るだろうからである。そして安定・自律型の老人は、来るべき時にはより潔く死を受容するかもしれない。一方、攻撃的で怒りに満ちた愛着モデルを持つ老人(子どものC1に相当すると考えられる老人)は、争い続け、他者にケアをしてもらうために依存的、操作的、高圧的な行動をとるのではないだろうか。消極的抵抗(passive-resistant)型の老人(子どものC2に相当すると考えられる老人)は、比較的早くに断念してナーシング・ホームに定住するかもしれない。回避的、防衛的な老人は、強迫的に自己依頼的に振る舞いがちであり、利用可能な支持的人物やサービスとのやりとりを否定するかもしれない。また、加齢に伴う変化は、人生の初期で長期の分離や実際の喪失といった混乱を経験した人々にとっては、昔の不安を再活性化させる可能性を持つだろう。つまり、老年期を迎えて加齢に伴う変化に対処する上で、いかに容易に他者からのケアを引き出し受容するかについては、その人の愛着についての表象モデルが多分に反映されているのではないか、としている。尚、以上の論考はあくまで未実証なので、その点に留意すべきであることはColin自身も強調している。

III. 老親と成人子 一介護をめぐってー

老人は誰に対して愛着行動を向けるのであろうか。Colin(1996)はこの問い合わせに対して、大抵の場合は成長した子どもであり、そのとき親子の力関係や責任関係には何らかの立場の逆転や交替などが生じているのだとしている。つまり、子どもが幼い頃には親が子どもを保護し、子どもが成人になると親子は相互に対等に近い関係に移行していく。そして親が老いると、今度は子どもが親を保護する立場となるのである。これは多くの文化で根強く見られる現象であるという。

愛着理論では、子どもが親をケアすることは役割逆転とされ、不安定型の1つの大きな特徴とされている。しかし、親が老いて何らかの保護を必要とするようになったとき、成人した子どもが老親のケアをするということは、生涯発達的に見れば必ずしも不安定型の特徴と結びつけて考えるべきものではないと理解できる。

実際、老人たちが老年期に至るまでの間に長期間親密な関係を維持し続けている対象としては家族関係が優勢であることを鑑みると(Kahn & Antonucci, 1980; Antonucci, 1994)、実質的な介護の担い手として想定される人物が子どもである場合が多いと考えることが出来、老親と成人子との関係に研究上の注目が集まり始めるのも肯けるものである。

これまでの乳幼児とその親を中心とした愛着研究が明らかにしてきた親子関係というテーマの延長として、老年期に関する愛着研究においても親子関係、すなわち老年期を迎えた親と成人期の子どもとの関係を取り上げられている。介護を受ける側としての老親と介護する側としての成人子との間には、愛着の個人差と精神的健康という観点から何が見えてくるのであろうか。

A. 成人子(介護者)の個人差

介護者である子どもの側の個人差を捉えた研究としては、以下のものを上げることができる。老母の介護をする78人の娘を対象に、母娘間の情緒的なつながりと介護に対する義務感が、介護負担感にどのような関連を持つのかが検討された(Cicirelli, 1993)。その結果、老母との強い情緒的なつながりの歴史を持つ娘は、主観的な負担感を報告することが少なく、多くの援助行動を行っていることが示された。一方、強い義務感は負担感につながっていた。

また、痴呆患者の介護者のうち病前の患者との親密

な関係を報告した介護者は、親密でなかったと報告する介護者よりも、経験する負担感は少ないという結果が得られている(Williamson & Schulz, 1990)。

Townsend & Franks(1995)の報告によれば、介護者である成人子が病気の親との間で情緒的な親密さを強く感じているほど、成人子はストレスや鬱をより低く、主観的効力感をより高く経験していたという。また逆に、成人子が老親との関係で大きな葛藤を感じているほど、成人子のストレスや鬱はより高く、主観的効力感はより低く経験されていた。

更にCrispi,Schiaffino,& Berman(1997)が、痴呆の親を持つ成人108名を対象に、Hazan & Shaver(1990)の記述を応用して愛着スタイルの測定をしたところ、回避型16.3%と不安・アンビバレント型7.7%とを合わせた24%が不安定型、残り76%が安定型と分類された。これらの成人子(介護者)の愛着スタイルは、介護する上での行動上の困難と心理的な困難という2つの介護負担と関連していた。またこの研究では、愛着スタイルの分類とは別にとらわれ性(親との関係にとらわれている程度)の指標をとっているが、これは最近2週間での親を慕う気持ちや親との関係性についての考えに関して量的尺度への回答を求めたものである。その結果、成人子が親との関係にとらわれている程度が高いと、心理的な負担が経験されやすかった。しかし人口動態的な要因は、心理的な負担とは関連していなかった。これらの結果から、老親に対する成人子(介護者)の愛着が安定していることは、介護上の緊張や重い負担から介護者を保護する緩和的役割を果たしているのではないかと考察されている。

B. 老親の個人差

一方、介護される側である老親の個人差に注目した研究には、どのようなものがあるのだろうか。Miesen(1992)は未実証ながら、痴呆患者は恐らく病前人格に結びついたそれぞれの愛着行動スタイルを示すだろうと論考している。

Magai & Cohen(1998)は、中期・後期痴呆患者168名とその介護者を対象に、痴呆患者の病前の愛着スタイルを介護者に回顧的に評定してもらい、痴呆患者の病前の情動制御スタイルや痴呆の行動上の症状と、介護者の負担感との関連を検討した。高齢患者の愛着スタイル(安定型か回避型かアンビバレント型か)は、情動制御の特徴と関連しており、若年サンプルで得られているパターンと類似したものだった。しかし、このサンプルにおける愛着スタイルの分布は有意に異なって

おり、若年サンプルでの分布に比べてアンビバレンント型が少なかった。痴呆の行動上の症状では、アンビバレンント型の患者は安定型や回避型の患者よりも鬱や不安が高かったが、回避型の患者はアンビバレンント型の患者よりも活動障害が多く見られ、安定型の患者よりも妄想症状が多く見られた。また、安定型の患者の介護者は、両不安定型の介護者よりも総体的に負担感が低かった。回帰分析の結果、愛着スタイルは介護者負担の予測において最大の分散を説明していた。つまり、介護者が報告した老親の病前の愛着スタイルは、介護者にとっての老親に対する介護のしやすさ、しにくさを予測する結果となった。

C. 現実の介護場面との接点を求めて

以上の先行研究から得られている知見をまとめると、介護問題はそれぞれの親子の歴史の上に成り立っていることがうかがえる。愛着に対するネガティヴな関係性は介護者のより大きな負担感やストレスに結びつき、ポジティブな関係性はそれを緩和していたということができよう。

子どもの保護と老人の介護を全く同じものと考えることはできないが、AllenとWalker(1992)は、高齢の母親を世話する娘は母親の晩年の生活において、自分の幼少期に母親の行動が果たしたのと同様の機能、すなわち生命を保護したり、発達を促したり、社会に受け入れられるようにしたりという機能を満たしているとしている。

老親が介護なくしては生きられない存在となったとき、介護される側にとっても介護する側にとっても、より負担の少ない介護の実現は、現実場面からの切実な要請となってくる。老人介護場面をめぐっては、老人虐待という現象が老人福祉における重大な問題だと認識され始めており、児童虐待や配偶者間の暴力と並ぶ社会問題として注目を集め始めている(金子, 1987; 多々良, 1994; 高崎, 1998)。老人虐待には、身体的虐待、性的虐待、情緒的心理的虐待、世話の放任、経済的・物質的搾取などが含まれるとされている。

殊に我が国では、老人介護は家族がすべきものであるという社会通念や、公的な介護サービスを積極的に利用することに対する抵抗感が根強い。60才以上の男女を対象とした国際比較調査では、「子や孫とはいつも一緒に生活できるのがよい」と考える60歳以上の老人の割合は、日本54.2%、タイ61.1%、韓国54.6%である一方、ドイツ13.4%、アメリカ4.0%であり、我が国の老人にとっては子や孫との同居が非常に高いニーズと

なっていることがうかがえる(総務省長官官房高齢社会対策室, 1997)。実際の日本の65才以上老人の子どもとの同居率は、1975年では68%、1994年では55.3%と、核家族化によって低下しているとはいえ欧米諸国と比べれば依然高率である。(因みに、今後もこの低下は進み、2020年頃には高齢者世帯の約半数は1人暮らしと老夫婦のみの世帯になるだろうと予測されている。その場合、独居老人は圧倒的に女性ということになるといわれている。)このように老人の同居意向が高く、かつ実際に家族と同居している老人が多いにもかかわらず、孤独感を感じる人は日本では61.1%と最も高く、アメリカ38.2%と対照的であったという(下仲, 1998)。

自分の子どもに介護されることが誰にとっても一番の幸せなのか、という問い合わせについて、改めて考えてみると必要があるのかもしれない。また、もしそうだとすれば、介護する側、介護される側、双方に負担の少ない介護を実現していくためには、どのような要因が鍵となるのかということも、現実の介護場面への貢献という意味では考えていく必要があるだろう。個人の生涯発達はもとより、世代間の問題をも含めて捉え得る愛着理論からのアプローチは、1つの有効な観点を提供し得るものといえるのではないだろうか。

IV. 過去の表象化 一成人愛着面接と過去回想-

成人愛着面接(AAI)は、成人期の愛着を測定する標準的手法として現在世界的に受け入れられている手法であり、被養育経験を中心とした自伝的記憶を問うことを中心に構成されている。そこでは、過去経験がどのように表象化されており、またそれが現在の対人情報処理様式としていかに機能しているのかということに焦点が当てられる。

老年期における過去経験の表象化に関するものとしては、回想研究をあげることができる。無論、AAIと直接的に結び付けて考えることは慎まなくてはならない。しかし、老年期における自然な行為としての過去回想という営みに臨床的効果が指摘されている中、老人にとっての過去の表象化の意味と、愛着の安定性との潜在的関連性は、何らかの形で想定され得るのではないだろうか。以下では、老年期の回想研究を過去の(再)表象化という観点から捉えることにより、成人愛着面接との接点を探り、更には生涯にわたる発達段階の中で内的作業モデルに変容が加えられる最後の機会としての老年期の可能性について概観していく。

老人が過去の思い出を手繕って、それを他者に語つ

たり自ら自伝としてまとめたりするという行為自体は、我々の日常的経験と照らしてみても非常に馴染み深い行為と言えるのではないだろうか。こうした回想や回顧と呼ばれる行為は、かつては過去に対する執着や現実逃避などの病理的現象と見られていた(下仲, 1998)。しかし現在では、回想は老年期に通常おこる人生の統合過程の1つであると認識されており、現在の不適応状態への対処としての機能を持ち(長田・長田, 1994)、適応を高めることが示されている(Haight, 1988)。またこのプロセスは、老人が人生経験や歴史を想起するという意味で、セラピーや高齢者教育プログラムの基礎として役立つことが結論づけられている。回想は人生に折り合いを付け受容するための1つの方法であり、過去を回想することによって自己の一貫性や継続性の感覚を獲得でき、過去の体験や葛藤が再検討され統合される可能性がある(フリード, 1998)。

老年期に限らずに、過去を回想するという行為自体に関しては、どのようなことがいわれているのであろうか。複数の研究者たちが、記憶の埋め合わせは、その個人の現在の自己概念と一致する過去におけるエピソードの方がセルフ・スキーマと矛盾するイベントよりもよりよく思い出されるという、再構築のプロセスであるとしている(Hess, 1994; Webster & Cappeliez, 1993)。また、人はその個人が現在持っている自己と他者についてのモデルを確認する方法で、愛着に関する経験や相互作用を貯蔵し、想起し、再構築する傾向を持つことも指摘されている(Collins & Read, 1994)。

Andersson & Stevens(1993)は、老年期を対象に、過去の親との関係と老年期に至ってからの幸福感との関連を検討した。手続きは面接により、父母の養育行動に関して別々に回顧的に回答を求め、親との経験の質を測定するものであった。その結果、親との初期経験を望ましいものであったと回想した老人は、幸福感が高かった。その効果を、パートナーを喪失した老人に限定して更に検討すると、パートナーを喪失した女性よりもパートナーを喪失した男性において顕著であったという。

Webster(1998)は、社会心理学的な手法で愛着スタイルを分類し、それと回想との関連について老人99名(平均65.9才)と青年96名(平均22.5才)との比較研究を行った。その結果、幸福感に年齢と愛着スタイルの主効果が認められ、老年群の方が青年群よりも幸福感が高く、安定型と回避型の幸福感が高いことが示された。また回想することの目的と幸福感との関連を見ると、他者と会話をするために情報を伝達するために回想を

することと、幸福感との間には、正の相関が認められた。不快なエピソードを思い出して自己正当化を図るためにや退屈凌ぎのため、またアイデンティティの感覚を明確化するためや過去にうまくいった解決方法を思い出すために回想をすることと、幸福感との間には、負の相関が認められた。更に、愛着スタイルと回想の目的との関連では、安定型は不安定型よりも情報を伝達するための回想は多かったが、反対に不快なエピソードを思い出して自己正当化を図るためや、アイデンティティの感覚を明確化させるため、過去にうまくいった解決方法を思い出すための回想は少なかった。

愛着理論に基づいた研究ではなくとも、老年期の回想研究においては、人生初期の関係性についての回想はしばしば取り上げられているし(e.g., Haight, Coleman, and Lord, 1995)、回想を導く重要なトピックであると認められている(e.g., de Vries, Birren, and Deutchman, 1995)。老年期の回想というこれまで臨床的な実践を中心に知見が積み重ねられてきたテーマも、今後、過去の愛着に対する現在の心的状態について語る行為という視点から見直すことにより、新たな考察を与えることができるかもしれない。

ここで改めてAAIにおける分類上のポイントを考えてみると、子ども時代からの情動的にネガティブな記憶についての内省能力や対処能力、そして親の行動(殊にそれが好ましくないものであるとき)の背後ににある理由を情動的にも認知的にも理解し、それらを一貫して統合する能力の程度が重要であるといえるだろう(Grossmann, 1996)。

臨床的実践としての回想法が広く行われている一方で、なぜ回想という行為に臨床的な効果が認められるのかというメカニズムの解明が十分には行われていない現状では、愛着に関する経験の再表象化として回想という行為を捉え直してみることも、老年期の愛着を考える上では1つの方向性といえるのかもしれない。老人たちが回想を試みることによって自己の一貫性、継続性の感覚を獲得し、老年期の発達課題である統合の達成(Erikson et al., 1986)を遂げるプロセスと、AAIでいうところの内省能力を伴った一貫性のある語りという行為との間には、何らかの関連性を想定することはできないだろうか。更に加えるなら、臨床場面において回想法を用いるということは、安定性の獲得を意図的に促している側面を持つとは考えられないだろうか。

勿論、老年期の回想という営みと安定性の獲得ということを、安易に引き付けて論じることは慎まなければ

ばならない。しかし老年期の回想法をめぐって、臨床的実践が先行する一方でメカニズムの解明が急がれる現状では、なぜ回想法には臨床的效果があるのか、回想場面ではいったい何が行われどのような変化が生じているのかという問い合わせていく上で、愛着表象の変容という視点からの検討は何らかのヒントを与えてくれるのではないか。また、老年期という発達段階を意識するならば、生涯発達における変容の最後の機会とも捉えることができ、その解明の重要性は大きいのではないだろうか。

V. 今後の課題

本稿では、老年期を対象とした実証的な愛着研究を概観してきた。乳幼児期をはじめとする他の発達段階で得られている知見と比べると、その研究数自体が圧倒的に少なく、今後明らかにしていかなければならぬ課題が多い。

これまでの愛着研究全体の歩みは、記述的研究から関連の実証へ、更にはメカニズムに対する関心へと進められてきたとまとめることができるだろう。この歩みに照らせば、老年期の愛着研究は現在のところ記述的研究から関連の実証へと漸く歩を進めてきたばかりであり、今後はメカニズムへの関心が高まりを見せてくるものと予想される。例えば、安定と不安定とでは一体何が異なるのかという根本的問題や、何が不安定を安定に変容させるのかという臨床的に重要な課題を、今後の研究は背負っている。

やまだ(1995)は、主要な発達理論を、それぞれの理論が生涯発達を捉えるときの「発達観」を示す理念モデルに基づき、分類し整理を行っている。そこでは愛着理論は熟達モデルに分類され、発達を何らかのプラスの価値への接近とみなしき、成人期以降も以前の機能を基礎にその積み重ねの上に生涯を通して発達し続けるという可能性を追求するもので、生涯を通した一貫性と安定性が強調されると特徴付けられている。

老人の現在はその個人のこれまでの経験の積み重ねの上に存在するものなのであって、その基本的な仮定に立つ愛着理論から老年期を見直すことには、生涯発達的意義が非常に大きいといえよう。と同時に、過去からの連続性という問題に関しては、変容の可能性ということも視野に入れておく必要があるだろう。乳児期から20歳前後までを追跡した4つの長期縦断研究では(Waters, Hamilton, & Weinfield, 2000)、乳児期の愛着と青年期、成人期の愛着との関連が有意に示されたも

のは2研究(Waters, Merrick, Treboux, Crowell, & Albersheim, 2000; Hamilton, 2000)、示されなかつたものは2研究であった(Weinfield et al., 2000; Lewis et al., 2000)。老人が語る愛着関係は、過去の愛着経験を確かに積み重ねてきたものではあるが、過去の愛着に対する現在の心的状態であると考えるならば、成人してから愛着にまつわるどのような経験をし、それらに対してどのような心的状態を形成しているのかをも含めて検証する必要があるのではないか。老年期の愛着の個人差を検討するときには、連続性を検討していく視点とともに、変容可能性も視野に入れることが必要となってくるのだろう。もし変容する可能性が認められるとするのなら、老人が長い人生の中で経験する出来事の内の何が変容を促し、愛着表象の再構造化に関連しているのかということにも、今後の愛着研究は答えていく必要があるだろう。先行研究が依然少なく、生涯発達の最終ステージという他のどの発達段階よりも過去経験に費やされた時間が長いという老年期の特徴を考えるとき、過去からの連続性と変容可能性の両方の視点から今後検討を行っていくことは、殊更重要であるといえるかもしれない。

(指導教官 田中千穂子助教授)

引用文献

- Ainsworth,M.D.S.,Blehar,M.C.,Waters,E.,& Wall,S. 1978 Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation. Erlbaum.
- Allen,K.R.,& Walker,A.J. 1992 Attentive love:A feminist perspective on the caregiving of adult daughters. Family Relations,41,284-289.
- Andersson,L.,& Stevens,N. 1993 Associations between early experiences with parents and well-being in old age. Journal of Gerontology:Psychological science,48,3,P109-P116.
- Antonucci,T.C. 1994 Attachment in Adulthood and Aging. In M.B.Sperling, & W.H.Berman(Eds.), Attachment in Adults:Clinical and Developmental Perspectives. (pp.256-272) New York: The Guilford Press.
- Bartholomew,K.,& Horowitz,L.M. 1991 Attachment styles among young adults:A test of a four-category model. Journal of Personality and Social Psychology,61,226-244.
- Bowlby,J. 1969 Attachment and loss, Vol.1,Attachment. New York:Basic Books. (Revised edition, 1982).
- Bowlby,J. 1973 Attachment and loss, Vol.2,Separation. New York:Basic Books.
- Bowlby, J. 1980 Attachment and loss, Vol.3, Loss. New York: Basic Books.
- Carestensen, L. L. 1993 Social and emotional patterns in adulthood: Support for socioemotional selectivity theory. Psychology and Aging,7,331-338.

- Cicirelli,V.G. 1993 Attachment and obligation as daughters' motives for caregiving behavior and subsequent effect on subjective burden. *Psychology and Aging*, 8(2).144-155.
- Colin,V.L. 1996 Human attachment. New York:The McGraw-Hill Companies.
- Collins,N.L.,& Read,S.J. 1994 Cognitive representations of attachment:the structure and function of working models. In Bartholomew,K.,& Perlman,D. (Eds.),Attachment processes in adulthood:advances in Personal Relationships,vol.5. London: Jessica Kingsley Publishers.
- Crispi,E.L.,Schiaffino,K.,& Berman,W.H. 1997 The contribution of attachment to burden in adult children of institutionalized parents with dementia. *The Gerontologist*,Vol.37(1).52-60.
- Erikson,E.H.,Erikson,J.M.,& Kivnick,H.Q. 1986 Vital involvement in old age. New York:W.W.Norton & Company.
- フリード,A.O.(黒川由紀子・伊藤淑子・野村豊子 訳) 1998 回想法の実際－ライフレビューによる人生の再発見－ 誠信書房。
- Grossmann,K.E. 1996 Ethological Perspectives on Human Development and Aging. In Magai,C & McFadden,S.H. (Eds.),Handbook of Emotion,Adult Development, and Aging. (Pp.43-66) Academic Press.
- Haight, B.K. 1988 The therapeutic role of a structured life review process in homebound elderly subjects. *Journal of Gerontology*,43.40-44.
- Haight, B.K.,Coleman,P.,& Lord,K. 1995 The lynchpins of a successful life review:structure,evaluation, and individuality. In B.K.Haight & J.D.Webster (eds.), The Art and Science of Reminiscing: Theory, Research, Methods, and Applications. Washington DC: Taylor and Francis.
- Hamilton, C. E. 2000 Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence. *Child Development*,Vol.71.3.690-694.
- Hazan,C.,& Shaver,P.R. 1990 Love and work:An attachment-theoretical perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*,59.270-280.
- Hess,T.M. 1994 Social cognition in adulthood: aging-related changes in knowledge and processing mechanisms. *Developmental Review*, 14. 373-412.
- Kahn,R.L.,& Antonucci,T.C. 1980 Convoys over the life course:Attachment,roles,and social support. In P.B.Baltes & O.G.Brim (Eds.),Life-Span Development and Behavior.Vol.3. (Pp.253-286) New York:Academic Press.
- 金子善彦 1987 老人虐待 星和書房。
- Lang,F.R., & Carstensen,L.L. 1994 Close emotional relationships in late life :Futher support for proactive aging in the social domain. *Psychology and Aging*, 9. 315-324.
- Lewis M., Feiring,C.,& Rosenthal,S. 2000 Attachment over time. *Child Development*,Vol. 71. 3. 707-720.
- Magai,C.,& Cohen,C.I. 1998 Attachment style and emotion regulation in dementia patients and their relation to caregiver burden. *Journal of Gerontology:Psychological Sciences*, Vol. 53B (3), P147-P154.
- Main,M. & Goldwyn,R. 1984 Predicting rejection of her infant from mother's representation of her own experience:Implications for the abused-abusing intergenerational cycle. *Child Abuse and Neglect*, 8. 203-217.
- Miesen,B. 1992 Attachment theory and dementia. In G.M.M.Jones & B.M.L.Miesen (Eds.), Care-giving in dementia:Research and applications (Pp.38-56). London: Routledge/Tavistock.
- 長田由紀子・長田久雄 1994 高齢者の回想と適応に関する研究 発達心理学研究,5,1-10.
- 下仲順子 1998 老年期の発達と臨床援助 下山晴彦(編) 教育 心理学 II - 発達と臨床援助の心理学 - (Pp.313-338) 東京大学 出版会。
- 総務庁長官官房高齢社会対策室 1997 高齢者の生活と意識－第4回国際比較調査結果報告書－ 中央法規。
- 高崎絹子 1998 “老人虐待”的予防と支援 日本看護協会出版会。
- 多々良紀夫 1994 老人虐待－アメリカは老人の虐待にどう取り組んでいるか－ 简井書房。
- Townsend,A.L.,& Franks,M.M. 1995 Binding ties:Closeness and conflict in adult children's caregiving relationships. *Psychology and Aging*, 10. 343-351.
- de Vries,B.,Birren,J.E.,& Deutchman,D.E. 1995 Method and uses of the guided autobiography. In B.K.Haight & J.D.Webster (eds.), The Art and Science of Reminiscing: Theory, Research, Methods, and Applications. Washington DC: Taylor and Francis.
- Waters, E., Hamilton, C.E., & Weinfield, N.S. 2000 The stability of attachment security from infancy to adolescence and early adulthood: general introduction. *Child Development*, Vol.71.3.678-683.
- Waters, E., Merrick,S.,Treboux, D., Crowell,J., & Albersheim, L. 2000 Attachment security in infancy and early adulthood:a twenty-year longitudinal study. *Child Development*,Vol.71.3.684-689.
- Webster,J.D. 1997 Attachment style and well-being in elderly adults: A preliminary investigation. *Canadian Journal on Aging*, Vol. 16(1). 101-111.
- Webster,J.D. 1998 Attachment styles,reminiscence function, and happiness in young and elderly adults. *Journal of Aging Studies*,Vol.12 (3).315-330.
- Webster,J.D.,& Cappeliez,P. 1993 Reminiscence and autobiographical memory: complimentary contexts for cognitive aging research. *Developmental Review*, 13. 54-91.
- Weinfield,N.S.,Sroufe,L.A.,& Egeland,B. 2000 Attachment from infancy to early adulthood in a high-risk sample: continuity, discontinuity, and their correlates. *Child Development*,Vol.71.3.695-702.
- Williamson,G.M.,& Schulz,R. 1990 Relationship orientation,quality of prior relationship, and distress among caregivers of Alzheimer's patients. *Psychology and Aging*,5.502-509.
- やまだようこ 1995 生涯発達をとらえるモデル 無藤隆・やまだようこ(編) 講座生涯発達心理学第1巻 生涯発達心理学とは何か－理論と方法(Pp.57-92) 金子書房。